

聖書 ヨハネによる福音書16章4節～15節

4 「初めからこれらのことを言わなかったのは、わたしがあなたがたと一緒にいたからである。5 今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。6 むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。7 しかし、実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。8 その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。9 罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、11 また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。12 言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。13 しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。14 その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。15 父が特っておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

説教 「いかなる時も神はあなたを見捨てない」

◆只今司会者によって読まれましたヨハネによる福音書16章4節～15節を通して主イエス様の御言葉をお聞きしたいと思います。聖書の箇所と説教題は予告しておりますから、皆さんも読んで来られたと思います。今その箇所が読まれましたが、説教題は「いかなる時も神はあなたを見捨てない」であります。この「いかなる時も神はあなたを見捨てない」という題は表面的にはぴったりこないと思います。今日の箇所にこの題は、ずれがあると思います。しかし、今朝日曜学校の礼拝を行いまして、この題でよかったのだと、また子どもに教えられました。今日は紙芝居を使って、「ダビデとヨナタン」の話をしました。そして「こんなすばらしいお話しは、旧約聖書にしか出ていないのだから、みんなも旧約聖書と一緒に自分の聖書を持つように」と強く勧めました。

◆ところで説教題は、その箇所の要点と思うものを付けることが多いのです。そして教会の表に書き出しますから、大体3行で書ける字配りにします。今日の場合は「いかなる時も」「神はあなたを」「見捨てない」としています。今日の題は、今日の箇所だけではなく、今日の箇所の前後を読んで付けました。説教題は、ある意味では便宜的ですね。改革派の教会では、普通、説教題は付けません。それで日本の教会は、まだまだ伝道地の教会です。クリスチャン人口は1%そこそこです。そういう状況ですから、教会前の看板も大事な伝道の一つの手段です。それで「いかなる時も神はあなたを見捨てない」としたのです。

◆今日、日曜学校の礼拝後、突然子どもが「先生、麻薬に手を出す人は、なんですか？」と質問しますので、「あれを飲むと気持ちが高まるというか、高揚感が味わえるから手を出してしまうんだけど…」と、そんな風に言いますと、「大人ってずるい！」と言うのです。「大人は何か問題があると、お酒を飲んで、紛らわす」と言います。子どもはそうはいかないのだと言うわけです。そのような次第で、子供も人間として悩みを抱えて生きています。それで「いかなる時も神はあなたを見捨てない」というこの題は、そういう問題を持ちながら耐えて生きていく人への呼びかけになっていたのだと、そんな事を思いました。

◆私はもう一つこんな題も考えていました。「価値観の転換が起きる。」教会の表に出すなら、どちらがいいでしょうか。今日の箇所では、正に価値観の転換について語られています。イエス様が十字架で殺され、天に昇られ、真理の御霊を送られることを通して、この世の価値観の転換が起こされたのです。7節以下にこうあります。「わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする」と。「弁護者」、口語訳では「助け主」を遣わして、この世の価値観が転換される。弁護者、助け主としての御霊は復活の主ご自身と言ってもいいですね。司会者の上田長老が「三位一体の神」と言われました。御霊なる、助け主なる、弁護者なるお方、今日のところでは、13節「しかし、その方、すなわち真理の霊が来ると、あなたがたを導いて、真理をことごとく悟らせる。その方は自分から語るのではなく、聞いたことを語り、またこれから起こることをあなたがたに告げるからである。その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けてあなたがたに告げるからである」と。イエス様という御方は、誰をも蔑視しない、蔑まない。それがイエス様という方の人格そのものです。そのイエス様がここで「その方」、「その方」、「その方」と言っておられます。神の独り子であられるイエス様が、「その方」と呼ばれるのは、父なる神様と弁護者である御霊に対してだけです。その「その方」、これは敬語ですね。つまり父なる神様とイエス様と「その方」はまさに同格なのです。同格で一体であられる。そして同じ神様が、イエス様が、わたしたちと共にいてくださる在り方が変わって、聖霊として、私達と共にいてくださる。弟子たちには、イエス様が唯一の頼りです。そのイエス様が地上からいなくなられる。正に弟子たちは、死の試練に突き落とされます。しかしそのような者とも、生前のイエス様がそうであられたように、共にいてくださるお方が「御霊」であられる「その方」であります。その御方が「弁護者」「助け主」「慰め主」なる御霊であります。それで、御霊なる御方ですから、そして「霊」＝「プニュウマ」は、「空気」であり「風」であり「息」でありますから、わたしたちが今神様を礼拝しておりますここに神様は、イエス様は聖霊としてご臨在して下さるのです。イエス様が「その方」と言われる時、別の在り様を為さる、しかしご自分と一体の御霊を指しておられるわけであります。

◆それで、日曜学校の礼拝も祝福で終わります。「どうかイエス様の恵みと神様の愛と聖霊の交わりがみんないつも一緒にありますように。アーメン」と唱え日曜学校の礼拝を終わります。イエス様の恵みと神様の愛に、聖霊なる神様との交わりの中でわたしたちは与るのです。これが礼拝最後の祝福なのです。

この祝禱に代わるような、我々が受けうる幸いは他にありません。ですからこのお方が、大人であれ子どもであれ、如何なる試練に落ちて、この御方は共にいて下さる。どのような場にもどのような時にも、正に、「時空を越えて」という言い方がありますが、「時空を貫いて」わたしたちと共にいて下さる神様が、三位一体であられる。これはこじつけではなく、聖書を、素直に読んで整理すると、神様は三位一体の神であられるわけです。私達は今、この三位一体の神様を礼拝し、祈り、讃美を捧げているのであります。

◆かかる次第でありまして、真理の御霊の降臨において、価値観の転換が起こるわけですね。新約聖書にはイエス様は「甦って」という言う表現がしばしば出てきます。そしてわたしたちの主題聖句も「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなた方を遣わす」というお言葉も、復活のイエス様が弟子たちに現れてお語りになった御言葉です。けれどもこのお方は生前の地上のイエス様のお在り様ではなくて、復活のイエス様が、正に霊として弟子たちに現われなされたということでありまして。それで今、申し上げたかったことは、「甦って」というふうに訳されているのは、「甦えられて」と受け身に訳するのが文法的には正しいのです。なぜかと言いますと、イエス様は地上では罪人、異端者、或いはローマの支配をくつがえそうとした革命家、そういう烙印を押されて死刑になった方です。けれどもこの御方の歩みこそが、神様の御心に叶うことであり、御自分に託された業を忠実に成就された。そのことを神様が良しとされ、義とされた。義認された。それ故に「甦えられた。」復活とはそういうイエス様が神様によって義とされた出来事なのです。

◆その方復活の主が、聖霊において来たもう時は、8節にありますように、「罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。」つまり、ユダヤ当局はキリストを亡き者にすることによって自分たちは神に仕えているのだと思っている。けれどもその方が来れば、「罪について、義について、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと。義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、また裁きについてとはこの世の支配者が断罪されることである」。正にユダヤ当局もこの世のイデオロギーも、これが正義だ、義だとしていることの逆転が起こるわけです。この世はイエス様の為さったことが理解できなかった。しかし「その方」真理の御霊が来る時に、真理とは何かを示される。「真理」はその当時のギリシャ思想の中核ですね。或いはユダヤ教徒ならば「義とは何か」が根本問題です。彼らは、義は我らにありとするのですが、ずれているのです。そこにイエス様による根源的改革、革命という表現も足りないほどの事がイエス様によって起こったのです。それがイエス様の甦らせ、復活です。つまり、イエス様の御業が義とされて、そのことを私たちに啓示して下さる御方が真理の御霊なのだということが、ここに語られていることでもあります。

◆それで「いかなる時も神はあなたを見捨てない」との題は今日の箇所だけではびたっと来ないのですが、ここをイエス様がおっしゃった如くに受け止めようと思うと、その前後、文脈を読まねばなりませんね。それで14章の15節から「聖霊を与える約束」という小見出しが付いており、今日のところもそうですし、

次回読むところもまだそうです。そういう流れの中の今日の箇所であります。そして14章18節にこういう御言葉があります。「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻る」と。これが復活の主の顕現、御霊、慰め主、弁護者としてのイエス様です。先週「死の試練」と言いました。人間は大人も子供も、孤児になったように苦しむのですね。

◆この時の弟子たちの状況はすごく厳しいものです。会堂から追い出される。あなた方は憎まれる。殺される。そういう状況の中で、イエス様は語られているわけです。けれども、私があなたがたより先に追放され、憎まれ、殺されたのだということを覚えておきなさい。そして今わたしが語ることは、あなたがたに同じようなことが起こった時に、それが最後ではなく、それこそわたしたちには神がいます。天があるのだ。これはだれも犯し得ない。そういう祝福に私達は与る、その道に生きているのだということを、イエス様はこの前後のところでお話になっておられます。文字通りこれはイエス様の遺言ですね。

◆わたしたちは聖書に読んでいる内に愛唱聖句に出会います。愛唱聖句はそれ程長いものではありません。そして各人各様の愛唱聖句があります。そしてそれは聖書を読み解く鍵を与えられたことにもなりますね。私はローマ書8章が愛唱聖句です。そこにこう言う1節があります。「わたしたちすべてのためにその御子をさえ惜みまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」(32節)。そして、「キリストにおいて示された神の愛から私達を引き離し得るものは、この宇宙に存在しないと言っております。今日はこの『神の愛』という小見出しの付いた上の部分、8章26節をご覧ください。こうあります。「26 同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。27 人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。28 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」正に、弁護者なる御霊は、助け主なる御霊はこの私の内に居まして、万事を益になるように執り成して下さる御方です。今日の箇所の前後をずうーと読んでまいりますと、イエス様は「私の名によって願うならば何でも叶えてあげよう」と繰り返し仰っています(14:13~14、15:8、16:32~24)。イエス様の御言葉はすべて真実です。御霊なる主は共に居まして万事を益に変えて下さいます。この事を、身をもって経験してきた者として、この比類なき恵みを証ししていく一年でありたく思います。

◆お祈り致します。憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは御独り子を遣わし、また御霊なる慰め主をお送り下さいまして、わたしたちを顧み、助け、守り抜いてくださいます。そこまでわたしたちを愛し、かえりみてくださいます。どうかわたしたちが受け味わっているこの恩寵をわたしたちが身をもってすべての人に証していくことができますように、導いてください。この祈りイエス様のみ名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。